

#### 5.4 製品別原価の集計

以上のようにして、各製品ごとの直接材料費、直接労務費、直接経費を集計し、製造間接費を各製品に配賦しおわれば、当期発生原価はこれらを足し算することによって容易に求まることになる。表6.1のⅡ.の欄がそれである。

当期に完成した製品の原価は、

$$\text{完成品原価} = \text{期首仕掛品原価} + \text{当期発生原価} \\ - \text{期末仕掛品原価}$$

として求めることができる。これを表6.1の番号にあてはめると、

$$IV = I + II - III$$

という計算になる。そこで、あと必要なのは、期末に仕掛品になっているもののコストを見積る仕事だけである。

この見積りは、期首仕掛品について述べたように、

- (i) 直接材料費については、製品1台分の直接材料がすべての仕掛品に投入されているものと仮定し、
- (ii) 加工費については、仕掛品の数量に平均進捗度を掛けて完成品換算量を求めたうえで、完成品と仕掛品とに配分する、

という考えで行なう。各仕掛品の期末数量と進捗度は

表6.2に示されているとおりであるから、直接材料費は表6.3のデータを使うことにより、つぎのように求まる。

$$A : 110 \times 100 = 11,000 (\text{千円})$$

$$B : 160 \times 80 = 12,800$$

$$C : 240 \times 70 = 16,800$$

また、各仕掛品の完成品換算量は、

$$A : 100 \times 0.5 = 50$$

$$B : 80 \times 0.7 = 56$$

$$C : 70 \times 0.4 = 28$$

であるから、期末仕掛品に含まれる加工費は、

$$A : 95,760 \times \frac{50}{480+50} = 9,030 (\text{千円})$$

$$B : 104,650 \times \frac{56}{420+56} = 12,310$$

$$C : 84,790 \times \frac{28}{280+28} = 7,710$$

となる。期末仕掛品原価は、こうして求められた直接材料費と加工費との和であるから、表6.1のⅢの欄のようになる。

以上の結果、各製品ごとの当期完成品原価は、同表のⅣの欄のように求められる。これらを、各製品の完成品数量で割り算した値が、それぞれの単位当たり原価である。

## 話題

### 「線形計画法に新解法現わる？」続報

伊理正夫

前月号・話題で報告した後に入ったニュースについて。

Mathematical Programming Society の Committee on Algorithms (COAL) の出している Newsletter (同学会会員なら申込みば入手できる) の最近号に、Philip Wolfe が、ソヴィエトにおける基本的な文献、米国における最近の研究論文、各種新聞記事のリストを載せている。また、同学会は去る2月8日にIBMのSystems Research Instituteにおいて“Workshop on Polynomial-Time Algorithms for Linear Programming”を催した。そこでは、15名余の人達の報告、講演が行なわれた由。そこで配られたWolfeの資料には、41篇の関連論文リスト(古

いものから極く最近のものまで)とそれら論文のかなり詳しい解説が含まれている。その中で「入力データの桁数が限られているときには、実行可能領域の作る多面体の頂点の数はそう多くはないのではないか」という予想が述べられているのは興味深い。

これからも、この問題について続々と研究発表が現われるであろうが、筆者としては、これで、本会会員の方々への紹介の責は果たしたものとさせていたきたい。

なお、上記COAL Newsletterは、同学会会員全員に配布されるNewsletter“OPTIMA”が刊行されることになったので、その中に吸収される予定。